

西本願寺境内の埋蔵文化財発掘調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所

1 調査の概要

今回の調査は、西本願寺白洲境内地聞法総合施設の建設に伴い、8月下旬より実施している。調査区の幼稚園舎が明治40年に建設された木造建物であったため、いわゆる近現代の攪乱は少なく遺構の残存が期待された。

これまでの調査で、16世紀末頃の庭園に伴う池、堀、柱跡などの遺構を検出した。このうち調査区北西部の池は、ほぼ完全な形で検出することができた。

2 庭園遺構

調査区の北東部、現地表面から2～2.5mの地点で東西約20m、南北約11mにわたって庭園に伴う池を配する。北側には周囲を大きめの石で囲み、盛土をした岬が張り出す。東肩口は調査区外となり不規則な形状をもち、高低差をもって水が流れ落ちるように工夫された「瀬」にあたる施設であろう。検出面から池の底部までの深さは約1.6m、池の水は、東を流れる堀川から引き入れられ、当時はすぐ北を流れていた堀川の支流（現花屋町通、『本願寺境内図』に記されている）に注ぎ込んでいることが認められる。当初、底部は小石と砂により造られるが、後に漏水を防ぐため厚さ10cm程度の土層が堆積している。

池からの出土遺物には土師器、陶磁器、瓦類などがある。これらの遺物から、池は16世紀末頃に造られたと推定される。また、調査区南西部では東西方向の堀を検出した。堀の規模は、検出面で幅約5m、深さ1.6mで、江戸時代中期（1788年）によるものと考えられる焼土層が堆積しており、室町時代後半から江戸時代後期までの長らくの間に、このところ池に伴うような建物の復原にはいたっていない。

3 まとめ

今回検出した池は16世紀末頃に属し、本願寺が当地に移転してきた当初のものである。同時期の武家屋敷の式庭園の流れを感じさせる。

現存する西本願寺について書かれた最古の絵図である寛永8年（1631）の『本願寺寺内町絵図』に記述があり、そして、寛文元年（1661）に太鼓楼が移された後の江戸時代に描かれた絵図を見ると、いずれも境内北西部に池が存在している。『都名所図絵』（1780年）などの絵図で見る限り、調査区付近に池の存在は認められない。時期的に江戸時代中期に敷地をかまえたとは考えがたい。

そこで、絵図に描かる以前についてみると、本願寺は天正19年（1591）、顕如により京都七条堀川に本願寺を建て、一旦は嫡男教如が宗主を継ぐが、翌年には秀吉の命により弟准如にその職を譲り、教如自身は本山北東部の「裏方」には御堂・玄関・台所などができたという。その後、教如は徳川家康より烏丸六条から七条堀川に本願寺に分かれ、今日におよんでいる。

以上、本願寺分派の過程のなかで教如が隠居したとされる「裏方」が、調査区付近にあたることかから推定される。この池をきわめて良好な状態で検出することができた。今回のように後世の攪乱を全く受けずに、ほぼ完全な形で池の遺構を検出することができた。今回のように後世の攪乱を全く受けずに、ほぼ完全な形で池の遺構を検出することができた。今回のように後世の攪乱を全く受けずに、ほぼ完全な形で池の遺構を検出することができた。今回のように後世の攪乱を全く受けずに、ほぼ完全な形で池の遺構を検出することができた。

調査に関連する本願寺の記事

年 号 (西曆)	月 日	事 項
天正19年 (1591)	1月5日	豊臣秀吉、京都七条堀川の地を寄進 (本願寺文書)
	8月5日	顕如、天満より京都堀川に移る (法流故実条々秘録)
	8月6日	
	11月3日	阿弥陀堂の礎石ができあがる (天正十九年京都七条へ御移徒等記)
文禄元年 (1592)	6月21日	阿弥陀堂の上棟 (天正十九年京都七条へ御影堂移徒)
	7月4日	阿弥陀堂を移す (天正十九年京都七条へ御影堂移徒 教如は本堂北側の地に移り隠居する (大谷本願寺通記) (御堂・広間・玄関・台所などが建つ)
慶長2年 (1597)	7月2日	御影堂立柱 (慶長日記)
	11月3日	御影堂を移す (言経卿記)
慶長7年 (1602)		教如に対して徳川家康が烏丸以西の六条・七条間の土地を寄進する (東本願寺系図)
10年 (1605)		御影堂修理 (大谷本願寺通記)
寛永8年 (1631)		『本願寺寺内町絵図』 (調査位置に「川那部主馬殿後室」の記載有り)
寛文元年 (1661)	1月31日	東南隅の太鼓楼を現在の位置に移す (東本願寺家系)

お願い

12月9日(土)の午前10時30分から午後3時まで、調査現場を一般開放いたしますのでご見学
調査区全景写真(東から) 池跡洲浜(北西から)

『本願寺寺内町絵図』寛永8年(1631)より

『都名所図会』安永10年(1780)より

本因寺

遺構略測図

調査位置図